

龍谷

Ryukoku

2019 No.87



理工学部 宮脇 亮輔 さん

CONTENTS

01 | P01 Feature Article 巻頭特集 学長対談

自省と利他が
人を優しく強くする
安田 菜津紀 さん × 入澤 崇 学長

02 | P06 Ryukoku 5長 News

「先端理工学部」が開設
専攻を超えた学びに期待
松木平 淳太 教授 理工学部

03 | P10 People, Unlimited

基礎研究の積み重ねが決め手
学長賞を受賞
加藤 洋樹 さん 農学部

P12 People, Unlimited

理工学部の知識と旺盛な好奇心が融合
学生目線で大学を魅せる
宮脇 亮輔 さん 理工学部

P14 People, Unlimited

得意技は背負い投げ
2024年パリオリンピックでの日の丸掲揚が目標
米澤 夏帆 さん 文学部

04 | P16 Education, Unlimited

地域活性の可能性を探って
滋賀県内19カ所の「道の駅」を調査
李 复屏 教授 社会学部

P20 Education, Unlimited

現場に飛び出し生きた法を感じる事が
学ぶ意欲に火をつける
牛尾 洋也 教授 法学部

05 | P24 Special Article 特別企画

ゲノム解析が拓く
農学の新たな地平
永野 惇 講師 農学部

06 | P28 World, Unlimited

国際学研究科が新スタート
世界の現状を多角的に捉え
学際的な交流がさかんな場に
松居 竜五 教授 国際学部

07 | P32 Event Ryukoku Museum

お薬師さん、因幡の国から飛び来たる？
洛中の最古刹 平等寺の全貌に迫る
石川 知彦 龍谷ミュージアム副館長
丹村 祥子 龍谷ミュージアムリサーチアシスタント

P34 第16回青春俳句大賞

08 | P36 People, Unlimited 龍谷人

食育と環境保全を極める
出会うべくして出会った紅茶の仕事
増村 匡人 さん
株式会社 U.C.T.corporation 代表

P38 People, Unlimited 龍谷人

困っている人に真っ先に手を差し伸べる
それが警察官の仕事です
大西 隆志 さん
大阪府警察本部地域部長 警視長

09 | P40 News & Topics

最新情報

10 | P46 Book Café

新刊紹介

01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

自省と利他が 人を優しく強くする

フォトジャーナリスト

安田 菜津紀

×

龍谷大学学長

入澤 崇





安田 菜津紀 やすだ なつき Dialogue for People所属フォトジャーナリスト。1987年神奈川県生まれ。上智大学卒。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『写真で伝える仕事 世界の子どもたちと向き合って』、『あなたと、わたし』（共著）他。TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。

フォトジャーナリストとして、東南アジア、中東、アフリカ、日本と精力的な活動を続ける安田菜津紀さん。現代社会における宗教の役割、人間の可能性、教育と希望について、入澤学長と語り合った。

入澤 安田さんは、困難な状況にある人に真摯に向き合い、世界各地の子どもたちの写真などを通して平和のメッセージを発信し続けておられます。そうした活動や生き方の原点はどのようなところにあるのでしょうか。

安田 高校生の時にカンボジアに渡航し、人身売買の被害にあった子どもたちを保護する施設でお世話になりました。私と同世代で壮絶な経験をしているにもかかわらず、彼ら彼女たちが口にするのは、自分の体験の辛さや悲しさや怒りではなく、故郷の家族への思いや気遣いでした。カンボジアは「家族」の定義が広く、血縁に限らず「自分以外の守りたい誰か」という意味で話してくれていたのですが、モノが溢れた日本から来た自分にとって、とても衝撃でした。そんな経験をしてお「守りたい他者」のために生きようとする子どもたち。入澤学長がおっしゃる「利他」ですね。それによって彼らはこんなに芯が強くあれるし、人に優しくあれるし、人に優しさを配れる。自分はどうだったのかと省みて、「自分しか守るものがないってこんなに脆いのか」と、初めて気がつきました。それがこの仕事についたきっかけでした。

入澤 「自省」と「利他」は本学の教育が大切にすることです。本学に障がいをもつ同級生を支援する学内団体があります。自立就労支援が高じて靴磨き会社を起業し、昨年、京都市役所の近くに店舗をオープンしま

した。メンバーのなかには自分もひきこもりだったが大学に入って友達に支えられて活動を始めたという学生もいます。他者のために動くことで、自分自身も一歩踏み出せる人間に成長していける。学内でそうした循環が生まれているのを目の当たりにして、教育者としてこんなに嬉しいことはありません。

安田 素晴らしいですね。大きな社会問題と捉えてしまうと自分を小さく無力に感じてしまいがちですが、自分の同級生との「あなたとわたし」という関係性のなかで、一緒にできることを考え、実践に移していく。聞くだけで力をいただける感覚があります。一方で、世界を見ると、自分に利さない他者との間に物理的な壁まで作ろうとしたり、ヨーロッパでも移民難民の受け入れを拒否したり、日本は韓国との関係が緊張するなど、排他的で攻撃的な言動が世界を覆っています。利他とは真逆のこうしたうねりのなかで、いま教育現場ではどのような実践に取り組んでおられますか。

入澤 本学は全学部の一年生が「仏教の思想」を必修科目で学びます。そこで自分を省み、自分がいかに自己中心的であるかにまず気づくことを重視しています。他者との関係性のなかで私たち人間は形成されていく一方で、災害や戦禍に苦しむ人も同じ命ある存在であるものの、かけがえのない命が損なわれる現実がある。そうして自分や社会や国や世界を省みたうえで、仏教の精神に基づいて、それぞれの諸学問を学んでいく。本学の学びの大きな特色です。また、自分に対する先入観や偏見から自分自身を解放し、自分のなかに眠っている可能性を伸ばしてほしい。そういう意味で「You Unlimited」のメッセージを全学で掲げています。



入澤 崇 いらさわ たかし 龍谷大学学長。1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

安田 先日シリアから帰国したばかりなのですが、今回は北部を中心に過激派組織IS(「イスラム国」)の“首都”だったラッカにも行きました。4年前、2015年の2月1日、ジャーナリストの後藤健二さんがISに殺害され、その映像が流されました。私はちょうどその日からシリア隣国のヨルダンに渡航する予定だったので、非常に混乱したまま現地に飛びました。翌2月2日の夜に着いてみると、日本大使館前に100人以上がキャンドルを手に集まっていました。犠牲になった友を悼もうとSNSの呼びかけで集まった人々でした。ヨルダン人だけでなく、シリアからの避難民も、日本人である私を気遣い労ってくださって。殺戮の続く過酷な環境で、「どうして国籍も国境も越えて私たちのために悼んでくれるの?」と訊くと、「だってジャーナリストだろうと何だろうと同じ市民じゃない」と。利他の実践を当たり前のように話すんですね。ああ、この感覚を私たちはもってきたらどうかと、大きな宿題を受け取ったように感じました。

入澤 私の研究はアジア各地域の仏教の受容と変容がテーマです。アフガニスタンのバーミヤーン、パキスタンのガンダーラなどを見ていくと、こうした地域は紀元前から緊迫した状態が続き、紛争が起きている。しかし同時に、実は全く異質なものと異なる宗教が交流し、影響しあっていた事実があり、仏像や仏画にはっきりと見て取れるのです。2001年にタリバンが破壊したバーミヤーン大仏にしても、1000年以上にわたってあの磨崖仏を大切に守ってきたのは、実はイスラムの人たちだったわけです。また、古代アフガニスタンでイスラム教と仏教が共存していた例も近年見つかると、研究が進んでいます。

安田 仏教もイスラム教もキリスト教も、やはり本来は寛容性があるということに他ならない証しですね。破壊や対立は目立ちますが、そうした共存の例に希望の手がかりを見出せれば。私の古いイラク人の友人も、非常に敬虔なムスリムで、他宗教はもちろん攻撃者に対しても「自分は彼らを憎まない、そこからしか始まらない」と言い、そうした寛容性が宗教の本来の役割だとよく話しています。ですが、排他性が強まる今の世界においては、逆に境界線の絶対化が進んでいて、それが私たち自身を窮屈にさせていないだろうかと危惧します。一方、垣根を超える実践といえば、以前東京で「牧師ロックス」という牧師さんによるロックバンドのライブに行ったことがあり、これに対バン形式で競演するのが坊主バンドなんです(笑)。牧師にも僧侶にも相談できるハイブリッド人生相談会というのを一緒にやったりもしているそう。ユーモアのある軽やかな交流で、学生さんや若者も親近感をもちやすいかもしれませんね。

入澤 本学では2015年に世界仏教文化研究センターを創設しましたが、去年センター長に就任した久松英二教授は、実は神学を専門とする元神父さんです。古代において存在した宗教交流をもう一度再現するカンフル剤になればと。また、今年本学は創立380周年を迎えます。記念イベントとなる世界宗教フォーラムの開催など、世界の宗教が壁を超えて現代社会に向き合う、その実践を進めていきます。あわせて大学全体として「誰ひとりとり残さない」というSDGsを推進し、「摂取不捨」という語に示される仏教の慈悲の精神とをつないで、本学ならではの「仏教SDGs」に取り組んでいきます。

02 | Ryukoku 5長 News

「先端理工学部」が開設 専攻を超えた学びに期待

理工学部長・理工学研究科長
松木平 淳太 教授

従来の“タコ壺型の専門教育”から 分野横断型の専門教育へ

2020年4月から、現在の理工学部を改組し、「先端理工学部」が開設する（現在設置構想中）。国内の理工系学部では初の導入となる「課程制」をはじめ、25の多彩なプログラムの設置など、抜本的な改革がなされたことで、従来の枠を超えて先端技術を学ぶ場へと生まれ変わる。2年前から中心となって新学部構想を進めてきたのが理工学部長・理工学研究科長の松木平淳太教授だ。

「文部科学省による2020年教育改革に向けて、これまでの知識技能を習得する学習だけでよいのかという議論が学部のなかでもはじまっていたことから、将来構想ワーキンググループという委員会がスタート。先生方に自由にプレストしていただいて、既存の枠組みにとらわれないカリキュラムづくりを開始し

ました。その際に重点を置いたのが、社会的ニーズから出発したカリキュラムづくり。そこで、卒業生が就職する企業の方にアンケートをとったところ、基礎はしっかりしているものの、自主的に行動する力を期待したいという声が多数あがってきました」

そんなニーズから、導入されたのが「課程制」。従来の理工系学部では、専攻内の課目しか履修できないという“タコ壺型の専門教育”が課題となっていたが、「課程制」にすることにより、主たる分野の専門性を担保しながら、他分野を副専攻のような形で学修することが可能となる。課程には「数理・情報科学」、「知能情報メディア」、「電子情報通信」、「機械工学・ロボティクス」、「応用化学」、「環境生態工学」の6課程があり、1、2年次には「情報基礎」や基礎的スキルを学ぶ「フレッシャーズセミナー」、多彩な講師が大学での学びと社会のつながりを伝える「理工学の進

未来への境界線は、ここにある。





め」などで基礎と学習への意識づけをおこなう。そして3、4年で専門を深めると同時に「25のプログラム」のもと多分野の学びをおこなうしくみだ。「25のプログラム」では、社会課題に対応した「先端ロボティクス」、「人工知能」、「生命機能科学」など25のプログラムがあり、学生は所属課程にとらわれず、すべてのプログラムを選択できる。どのプログラムも、身につく力と想定される進路を明示し、学生が学びのなかで進路を意識できるようにした。

主体性を養う3ヶ月半の 自由学修期間「R-GAP」

もう一つの改革のポイントとなるのが、クォーター制度の導入と学生が自由に活動できる期間「R-GAP (Ryukoku Gap Quarter)」の設置だ。クォーター制度を導入し、現行のセメスター制度と併用することで、短期間での集中的な学びが可能となる。また従来のカリキュラムでは学年・学期毎に必修科目が配置され、長期間の留学などへの参加が難しい状況があったが、今度の改革ではあえて3年次の2クォーター目に必修科目を



「先端理工学部」開設に向け、尽力する松本平淳太教授。

置かないことで、実質6月～9月半ばまでを自由学習期間とした。海外留学やインターンシップ、研究活動、ボランティア活動など大学側が用意したプログラムに参加するもよし、自分の興味ある分野に飛び込んでくるもよし。主体的に活動する力を養う期間にしたい狙いだ。

あわせて、新たな施設設備の整備も始まっている。簡易な3Dプリンタやレーザー加工機を備えた「STEM版 commons」(2022年整備予定)、学生の自主活動を支援するためグループで利用可能な創造的学生活動スペース「サテライト」(2020年整備予定)、コンセント付きハイテーブルなどBYOD対応の

自習スペース「スポット」(2020年整備予定)、また関西私大有数の無線LAN環境もすでに整備済み。また理工系人材にとって必要なグローバル教育として、大学院まで継続した英語教育も実施される。

「今の学生は、社会課題に対する意識が非常に高いんです。ただ、それをうまく引き出せていない気がしています。もっと理工系が社会でどのように貢献できるのか、自分たちに何ができるのかを見てもらい、意識づけすることで、学生は大きく変わり、キャンパスの雰囲気も生き生きしてくるのではないかと期待しています」

03 | People, Unlimited

基礎研究の 積み重ねが決め手 学長賞を受賞

加藤 洋樹 さん

農学部 植物生命科学科 4年生
大阪教育大学附属高校天王寺校舎出身

農学部では2017年より、企業の協力を得て、学生の自由な発想を活かした製品開発プロジェクトに取り組んでいる。2018年、プロジェクト第2弾としてコラボレーションを組んだのはコンビニ大手の株式会社ローソン。今回のテーマは『新しいお米のカタチ』。お米を商品開発という切り口だけでなく、流通や経済といった広い分野を含め、よりお米の消費量を増やすためのアイデアを募ったところ、2~4年生の12チーム(45名)が参加した。12月には、それぞれのチームが1年間かけた研究成果をプレゼンテーションした後、ローソン賞と学長賞を含めた7つの賞が発表された。

そして今回、学長賞を受賞したのが、チーム名「島ビール」の加藤洋樹さんだ。企画案は『発芽玄米を用いたビールの開発』。プレゼンテーション発表の当日、ブースを見ると、アルコールのない酵母液の入った大きな三角フラスコが2つと、説明用のタブレットが置いてあるだけ。明らかに他のブースより寂しい印象なのだが…。

「本当はビールを完成して出したかったんですけどね」と笑う加藤さん。完成には至らなかったこの研究が、学長賞を受賞できるとは微塵も思わなかったと言う。

「日本酒が好きで、お米でビールができな



1年間実験を重ねた成果をアピールする加藤さん。

いかと考えていました。日本酒は麹菌で作りますが、あえて酵母を使ってガスを発生させビールを作ろうと。そんな折、今回のお米のプロジェクトを知り参加しました。アルコールを発生させるには10%以上の糖濃度が必要なのですが、麦芽や発芽玄米、発酵促進剤を異なる9つの条件でブレンドするなど実験を重ね、1年かけてデータを集めてきました。受賞の理由が『基礎研究データの積み重ねを評価して』と聞いてとても嬉しかったです」

「チーム名の『烏ビール』は、研究室の島純教授の名字からとりました。発芽玄米に含まれるGABAはストレスに効果があると言わ

れています。完成すればお世話になっている島教授に一番に飲んでほしいです」

烏研究室にはチーム「烏ビール」を引き継いでくれる後輩もいるとのこと。今後は農学部実習農場で収穫した『龍谷米』を使った『お米のビール』の完成を期待している加藤さんだ。



加藤 洋樹 さん

03 | People, Unlimited

理工学部の知識と 旺盛な好奇心が融合 学生目線で大学を魅せる

宮脇 亮輔 さん

理工学部 情報メディア学科 2年生
滋賀県立八日市高校出身

目の前に広がるアンビエント・ウォールと呼ばれる巨大な液晶画面、鮮やかなグリーンのクロマキースクリーン、業務用のデジタルビデオカメラや照明機器がセッティングされたバーチャルスタジオ。理工学部が誇るそれらの最新機器を操りウェブ発信するサイト「EMICs」。

EMICsは、学生のみから見える龍谷大学の魅力を、在学生や保護者はもちろん、龍谷大学を知らない人達にも知ってもらうために立ち上げた広報チームだ。昨年8月に始動、現在メンバーは10名。リーダーを務める宮脇亮輔さんにEMICsの魅力聞いた。

「検索でヒットする工夫、SNSとのリンク、ドローンなどを使い人の目を引きつける画像など、情報メディア学科で学んだ知識と、大学の設備としては想像できない最新機器との融合で創ったサイトです。大学側が発信すると、どうしても堅い印象になりがちですが、私達が一番知りたいことは何か?を念頭に情報発信することを心がけています。例えば、僕たちが普段使っている大学の施設についてEMICsのサイトで画像を駆使してわかりやすく紹介したり。なかでもアクセス数を集めているのが、『レポートを乗り切れ、ノートパソコン購入のすすめ』。僕も聞いて驚いたのです



EMICsのメンバーと打ち合わせする宮脇さん(右)。國友 芽夢さん・理工学部4年(中)、栗山 葵さん・理工学部3年(左)。

が、レポートなど課題を出された時にそれをスマホで済ませてしまう学生が多いとか。せっかく大学生なのでパソコンには触れてほしいなあと、それなら僕はパソコンに詳しいからお勧め機種はこれだよって。コンピューターを使ってレポートを書くことの良さや利点を簡単に紹介しています。僕は動画編集が得意で、ファッション情報に詳しいメンバーや、デザインにたけているメンバーもいます。2年生ながらEMICsのリーダーに選ばれましたが、学年などの縦の壁を超えたグループワークと得意分野を連携する多様性がEMICsの特長です。2020年4月に設置される先端理工学

部も学科の隔たりをなくし分野横断型の専門教育が受けられるのが特長と聞いています。EMICsがその先駆けとなるかもしれません」

EMICsでは活動メンバーを募集中。詳しくは、<https://emics.rikou.ryukoku.ac.jp/>で。



宮脇 亮輔 さん

03 | People, Unlimited

得意技は背負い投げ 2024年パリオリンピックでの 日の丸掲揚が目標

米澤 夏帆 さん

文学部 4 年生

東大阪大学敬愛高校出身

2018年10月、4年生最後の大会、全日本学生柔道体重別団体優勝戦。自分の戦う前で優勝が決まった。涙が止まらなかった。米澤キャプテンが、一番欲しかったのはチームで勝ち取る団体戦優勝。中学・高校時代にも制し、戦い方は知っていた。しかし龍谷大学入学当初、個人戦は強いがチームで戦える柔道部でなかった。

高知で生まれ、小学2年生で始めた柔道。優勝を重ね順調に駆け上り、強豪大学への誘いがあったが、人に敷かれたレールを進むことへの違和感があった。社会人として自立できる自分を見据え、龍谷大学を選んだ。そ

の時、声をかけてくれたのが堀田幸宏監督。この監督、不思議に伸びしろのある人材を見つけることにたけている。3年生の時に「人材は揃えた、あとは任せた」と言われ、自分ができることは、行動で示すこと。試合に負けな練習をすること。4年生でキャプテンに選ばれると、チーム一人ひとりとのコミュニケーションにも工夫を重ね信頼関係を築くことに心がけた。そこからじわりじわりチームの底上げが始まった気がする。しかしこの大会前、チームの雰囲気はどん底、一つ前の全日本学生柔道体重別選手権大会で思った成績が残せずチームの雰囲気は最悪だった。何とかしよう



次の試合に向けて練習する女子柔道部。

と、選手だけで発散できる時間をもらえないかと監督に嘆願し、焼肉へ。食べながら何でも話を聞くぞ…と。出るわ出るわグチが。これが功を奏したのか試合当日、観客席で見ていた他校の監督までが「龍谷いつもと違うぞ。龍谷が勝つぞ」と口にしてた。自分の63kgクラスは大将(先鋒・次鋒・中堅・副将・大将の順で戦う)だったが、勢いに乗ったチームは大将戦前で優勝を決めた。チーム総合力が試される団体戦優勝、大学生生活最高の締めくりになった。

卒業後は自衛隊体育学校に進むことが決まっている。ここは日本中から選ばれたアスリートがレベルアップしていき、階級が上がる

と給料が上がるプロ養成場のようなシステム。

ファインダー越しの笑顔からは戦う要素は感じられない女子大生。しかし選んだのはやはり柔の道。めざすは2024年のパリオリンピックでの日の丸掲揚。

今後の柔道部の活躍については、<http://ryukoku-sports.jp/judo/>で。



米澤 夏帆さん

04 | Education, Unlimited

地域活性の可能性を探って 滋賀県内19カ所の 「道の駅」を調査

社会学部コミュニティマネジメント学科

李 复屏 教授

「食」を入り口に道の駅を調査

ドライバーや観光客の休息の場として、また地域特産の土産物を買えるなど、便利な機能で人々に親しまれている道の駅。1993年に山口県に初の駅が創設されたのを皮切りに道の駅は続々と増え、いまや全国に1145もの駅がある。近年、地方経済が衰退するなかで、道の駅は各地域の個性を活かした様々な商品やサービスを提供することで地域活性の中核的な役割を担える場、と再評価されており、そのさらなる活用方法が模索されている。そんな道の駅を対象にフィールドワークを展開しているのが、李复屏教授による実習科目だ。

地域経済が専門の李教授は、自他ともに認める食いしん坊。以前より生産者の顔が見える野菜や、手作りで安心できる食品が並ぶ道の駅に注目し、週末に買い物に走ることも多かったという。

「道の駅に通ううちに、この場所が地域の窓口としてどのように役立っているのか、より有効に機能させるにはどうしたらよいのかなど興味がわいてきました。身近な食を入り口にすれば、学生も楽しく学べるのではと考え、授業として取り上げることにしたのです」

地元の特産品で生産者と消費者を結ぶ

授業では目的を①滋賀の経済・食文化を調べる、②道の駅の地域づくりへの役割を調べる、③アンケートや聞き取りなど調査方法を調べる、の3点に置き、2017年はまず道の駅とは何かを知るために、受講生全員で滋賀県内19カ所の道の駅を見学。各駅長に簡単なアンケートも実施した。それらの情報を基に2018年には、滋賀県の特産品を通じて道の駅を知ってもらう活動を開始。栗東市の道の駅「アグリの郷栗東」の限定商品「まるっぽ豆腐」や「備長炭食パン」などを用いた



食材への興味も芽生えた学生達。初めて食べる朝どり野菜の美味しさに気づく。



オリジナルメニューを大津市のレストラン「石山ミートマルシェ」と学生が共同開発し、レストランで提供、注文客にはアンケートもおこなった。「知られていない美味しい特産品はまだまだあります。生産者と消費者を結ぶ架け橋になれば嬉しい」とは、レシピ開発に参加した美濃優磨さん(3年生)のコメントだ。活動を進めるうちに、学生達の間には、生産者の愛情が詰まった地元特産品を広めたいという思いが強くなっていったという。

また、この取り組みには思わぬ副産物があったと李教授。「授業では毎週ランチミーティングをしているのですが、授業が進むにつれてお弁当を持参したり、コンビニのもの

でも栄養バランスを考慮するなど、学生の食への意識が変わってきました。授業で用いる食材は独自の基準を設けており、安心・安全な食材の選び方も学んでいます」

いま道の駅に必要なのは、「若い力」

昨年12月には、竜王町「三井アウトレットパーク滋賀竜王」にて、滋賀県内の道の駅の特産品が一堂に会する物産イベントが開催された。龍大生チームもブースを設置し、県内全ての道の駅の紹介文と目玉商品掲載したマップを作成し展示したほか、各道の駅の担当者にインタビューもおこなった。反響は



李复屏・りふびん

中国武漢生まれ。1991年、中国広州外国語学院卒。2001年、龍谷大学大学院博士課程修了、博士(経済学)。2013年より龍谷大学社会学部教授。専門は地域経済。中国国内の地域格差の実態や内モンゴル自治区の貧困問題を研究。著作に『中国経済改革と地域格差』(2004年/昭和堂)、共著に『ミニニティリーダーを育てる』(2014年/晃洋書房)等。趣味は「本当に美味しいものを探す&食べること」。道の駅の野菜を料理して学生に振る舞うなど、食の楽しさ、大切さを学ぶ機会も大切にしている。

道の駅「藤樹の郷あとがわ」にて、駅長より、道の駅と地域経済の関わりについて学ぶ授業。



よく、各駅長や竜王町長から「もっと若い人の発想がほしい、一緒に道の駅の活性化を考えたい」と熱いオファーもあった。学生の活動が歓迎される背景には、道の駅ユーザーは中高年が中心で、若者には道の駅が存在自体があまり知られていないという課題がある。実際、この授業でも大半の学生が、道の駅を訪れたのは初めてだった。

各方面からの期待を集めてスタートする2019年の授業では、これまでの活動を継続すると同時に、さらなる可能性を模索したいと李教授。「道の駅は地域にとって今後も重要な役割を担える場所。今年も学生とともに新たな可能性を探っていきます」と意気込む。

04 | Education, Unlimited

現場に飛び出し
生きた法を感じることで
学ぶ意欲に火をつける

法学部

牛尾 洋也 教授

アクティブ・ラーニングを取り入れた 新科目「法政アクティブ・リサーチ」とは

六法を片手に講義室で判例とにらめっこ。そんな従来の法学部のイメージが変わりはじめている。2017年から本学法学部でスタートした「法政アクティブ・リサーチ」科目は、これまでにない、受講生が主体となった積極的参加型・提案型の授業である。アクティブ・ラーニングの手法を独自にアレンジし、講義室から飛び出して、政府機関・自治体、各種法人の現地調査等をおこなうのが特長で、アプローチ、ヒアリング、成果発表までを学生が主体となり学びを実践するというもの。

「疑問点をまとめ質問状を作成し、自分達でアポ取りまで。社会人としてのマナーも学べ、社会に出てから役立つ貴重な経験になる」と学生からも好評だ。この「法政アクティブ・リサーチ」を中心となって企画している牛尾教授に、新科目への想いを聞いた。

「私自身、これまでも景観訴訟での原告や被告と話をしたり、その街並みを現地で調べた経験から、実際の現場を知るということが、学生にとっても大きな刺激となり、生きた法律学を学べると確信していました。また、法学部の学生全員が卒業してから法律専門職に就くわけではないなかで、社会に出て活躍するための基礎力を養成する必要性を感じていたこともアクティブ・ラーニングを取り入れて教育改革をおこなう契機となりました。自ら課題を見つけ、仲間と協働しながら答えのない問題の解決策を見つけ出していく力は、これからの社会で必要とされる力です。実際に現場を経験した前後で学生達の成長はあきらかな違いが見られます。経験値が上がると自ら学びに対しての意識が変わり、一回り排気量が大きくなったような気がします。それは、これまで私のゼミを受けた学生が、おしなべて就職決定率が高く、第一線で活躍しているという結果にも現われています」



自身のゼミでも15年ほど前からアクティブ・ラーニングを取り入れている牛尾教授。



学生の主体的な学びが、 意欲と自信に繋がっていく

「法政アクティブ・リサーチ」は、共通講義と個別クラスからなり、共通講義では、調査方法や社会人マナーなど基礎力を養う授業や、外部から講師を招いてディスカッションをするなど、学生の興味を広く喚起する授業をおこなう。一方、個別クラスは4クラスあり、テーマの決定もクラスによっては、学生同士でコンペをおこない、全員の投票で決める。はじめの1カ月で問題の背景や関連する法律や施策について学び、数百ページの冊子にまとめるというから、学習量は相当なものだ。そこ

で主体的な関心と疑問を明確にしてから学生達は現地調査へ赴く。ヒアリング先のアポイントの取得や質問状の作成はもちろん、当日の司会進行も、交通や宿泊の手配まで全て学生主導でおこなわれる。また調査後、活動成果を報告書にまとめるなかでさらに考えを深めていくことを重視する点も、「法政アクティブ・リサーチ」の特長だ。

昨年の牛尾クラスのテーマは、「岐阜県内における地域資源を活かしたまちづくりについて」。学生達は岐阜県庁、美濃市役所、下呂市馬瀬など10数カ所へ取材し、第一線で活動する専門家を相手に意見を交わした。直に地域活性に奮闘する人々とふれあい、



牛尾 洋也・うしお ひろや

大阪市立大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学。2003年より龍谷大学法学部教授。専門は、民法、土地法制、質貸借法制。まちづくりや景観に関する調査では、これまで国立市や鞆の浦の景観訴訟問題等さまざまな訴訟の現場を学生とともに訪れ、いちはやくアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた教育を展開してきた。龍谷大学里山学研究センターでは、センター長を務め、自然共生・循環型の持続可能な社会のあり方を法律家の立場から研究・発信している。共著に『琵琶湖水域圏の可能性―里山学からの展望―』（2018年／晃洋書房）、『現代市民法学と民法典』（2012年／日本評論社）等。

長崎県への取材が決まり、各班ことにより合理的な交通手段などを決定する。



法律や制度によって変わる暮らしや地域の景観を目の当たりにした学生は、学ぶ意味や社会で働く意味、さらには生きる意味までを深く考え、顕著な成長が見られたという。

今年度の牛尾クラスのフィールドは世界文化遺産の登録が決まった長崎県へ。峠元太さん(2年生)は、「取材依頼のメールを書くだけで頭を抱えていましたが、一つずつクリアするなかで、社会人の方と接することにも慣れ、やればできるという自信が持てました」と語ってくれた。日本遺産班、世界遺産班、離島班とそれぞれのグループごとに取材先への現地調査に向けて下準備をして、講義室から飛び出して長崎へ。

05 | Special Article

特別企画

ゲノム解析が拓く 農学の新たな地平

農学部

植物生命科学科

永野 惇 講師

永野 惇 ながの あつし 1981年大阪府生まれ。京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 博士後期課程修了。京都大学生態学研究センター 連携研究員、科学技術振興機構さきがけ専任研究者を経て2015年から現職。共著に『ゲノムが拓く生態学』、『Photobook 植物細胞の知られざる世界』。受賞歴は、2018年 農学会 日本農学進歩賞、2014年 文部科学大臣表彰 若手科学者賞。

世界最先端の研究で受賞

本学農学部の永野惇講師が、平成30年度「第17回日本農学進歩賞」を受賞した。この賞は公益財団法人農学会が農学の進歩に顕著な貢献をした若手研究者に授与するもの。受賞対象となったのは「野外トランスクリプトミクスによる植物環境応答の研究」だ。世界的にも先例のない最先端の研究で、関係機関・企業や国内外の研究者の注目を集めている。

永野講師の専門は、分子生物学、情報生物学だ。植物の生命現象の実体を分子レベルで把握し解明しようとする学問で、ゲノム、遺伝子、DNA、RNAなどを扱うと考えるとわかりやすい。こうしたミクロの世界の研究は、ほとんどが設備や環境の整った実験室内でおこなわれる。一方、植物の本来の生育環境は野外であり、その環境は複雑だ。実験室では気温や光量をコントロールすることも可能だが、野外では環境は激しく変化する。そのため、実験室内でおこなう研究から実際の野外の植物の環境変化を類推することは容易ではない。

そんななか、永野講師は、これまでむずかしいとされていた実験室と野外を融合した研究を大きく前進させた。しかも研究対象はイネだ。数万種類に及ぶイネの全ての遺伝子のはたらきを調べ、複雑な野外環境下での生きざまを明らかにし、さらに気象データを用いた大規模なモデル解析をおこない、田んぼのイネの遺伝子のはたらきを解明。その先には生育の予測と制御、つまり人智を超える自然とのよりよい共生の道が見えてくる。新しい発想で、実験室と野外、ミクロとマクロ、遺伝子と「農」を直結させ、農学に新たな領域を拓いたことは、永野講師の大きな功績である。

常識破りの発想で壁を超えて

何が画期的か。ポイントは大きく三つある。一つ目は、桁外れな大量のデータ収集だ。

イネなどの植物には、約3万種類の遺伝子がある。生物の設計図といわれる遺伝子は、親から子へと遺伝情報を伝えるだけでなく、タンパク質の設計図としてもはたらく。遺伝子のはたらくことを「発現する」という。DNAがもつ遺伝情報がRNAに転写され、それをもとに合成されたタンパク質が生体内で様々な機能を担い、「生きている」という状態をつくる。みずから移動できない植物は、環境の変化にあわせて必要な遺伝子を必要だけ発現させることで環境に適応している。そのため、どの遺伝子がどのタイミングでどれくらいの強さで発現しているかを調べると、その時の植物がどのような状態であったかがわかる。

そこで永野講師らは、「とりえず全て測る」という思い切った方針のもと、多くの研究者と協力し、大変な労力をかけて数百サンプルに及ぶデータを収集した。朝、昼、夜、日照り続きや長雨、ゲリラ豪雨、台風直撃時などのデータもとった。

「遺伝子の発現は数分で劇的に変化します。環境の変化に対するイネの応答を網羅的に捉えるためには、細かなデータ採取が必要です。光が急激に変化する明け方などに5分おきに葉を採取したこともあります」

植える時期、標本採取の方法やサイクルなども工夫し、常識にとらわれない網羅的計測手法を開発したことが、それを可能にした。

二つ目に、この研究を可能にしたある技術の開発がある。永野研究室の特長は上述のとおり「全ての遺伝子を測定する」方法にある。特定のある一つの遺伝子を測定するのではなく、イネならイネがもつ遺伝子全てを測



定する。従来の一つ一つの遺伝子を測定する方法に比べて、桁違いに多くの情報が得られる。だが、大変なコストがかかる。

「そこで我々の研究室では、これまで1サンプル10万円程度かかっていたコストを、数千円程度まで抑える技術を開発しました。それを用いて日常的に数百サンプルの解析をおこなっています」。その結果から、「たくさんのサンプルを解析して初めて見えてくることがあるとわかってきました」という。

三つ目は、気象データと統合解析したことだ。得られた膨大な遺伝子発現データを、気温、降水量、日射量、風速などの気象データと関連づけて統合していく。田植えからの日

数、イネの体内時計の影響も加味しつつ、もっともよく説明できるモデルを構築していった。解析の結果から、イネの葉ではたらいっている遺伝子のじつに97%以上について、どんな環境下ではたらくかが明らかになってきたのだ。

「この研究の目的の一つは、自然環境下でのイネの生育予測、設計のための基盤技術の開発です。現在、イネの作況予測は、特定の品種を対象に同じ場所で何年も蓄積したデータを基に推定されます。そのため、ほかの品種や前代未聞の気象条件には適用できません。ですが、それが予測できるようになれば、凶作にならないための対策を講じる設計にもつながるのではと考えています」



分野や領域の枠にとらわれない永野講師。俯瞰的な視点から柔軟に取り組む。

しくみの解明という 基礎研究の意味と価値

現在は、さらなる精度向上をはかり、実験室内での測定との統合研究を進めているところだ。

30台のインキュベーターを使い、73に及ぶ条件下での遺伝子発現を調べる。温度、光量、湿度などの環境を人工的にコントロールできるため、実際の野外では滅多にない条件や、少しずつ数値の異なる幅広い条件でデータが得られる。これを野外調査の結果と統合することで、想定や予測の範囲をいま以上に広げていくことができる。

「私がしているのは、基礎科学としての生物学です。植物のしくみはまだまだ未詳です。しくみがわかったからといって予測ができるとは限りませんが、メカニズムの解明が次の一歩につながることは間違いありません」

これまで植物の生長に関する情報は、目で見える変化でしか捉えられなかった。長さ、太さ、幅、重さ、いずれも可視情報だ。いま、農学は、遺伝子発現という目に見えない情報を得た。分子生物学に気象データと農耕現場である野外データとの統合。この「農」にとっての新たな領域が、人と自然のよりよい共生の可能性を拓いていくことが期待される。

06 | World, Unlimited

国際学研究科が新スタート
世界の現状を多角的に捉え
学際的な交流がさかんな場に

国際学研究科 研究科長

松居 竜五 教授

2019年4月開設に向けて議論を重ねる教授陣。



従来の学問領域では捉えきれない リアルな国際問題に向き合うために

2015年に改組した国際学部で今年3月に第1期生が卒業を迎えたことを受け、この4月、大学院でも国際学研究科が新たにスタートを切る。

これまでの国際文化学研究科から「文化」の2文字を外すことで、文化のみに限らず幅広いテーマを多角的に研究し、より現代社会に即した学際的な学びをめざす。研究科長に就任するのは、南方熊楠研究の第一人者として知られる松居竜五教授。100年前に13年間も欧米留学した熊楠は、日本の文化的な国際化における最初期の人物だ。

「熊楠は国境や分野の垣根を超えて学問を探求し、そこで得た総合的な知恵を社会の課題解決のために用いた先駆者でした。20世紀になって学問は細分化・専門化が進み、それゆえに進歩した面もありますが、逆に見えなくなってしまった部分もたくさんあります。一方、世界では従来の学問領域では捉えきれないような様々な現象が日々生じており、このような現状に対応するためには、これまで以上に広い視野で多様な見解をもつ他者と対話しながら問題を解決し、多様な価値観・文化が共生する社会を実現させてゆく力が求められています。これまでも本学科は、国際関係論、文化人類学、言語学、比較文化学などの方法論を総合した学際的な研究を展開してきましたが、今回の発展的改組では、より幅広いテーマの研究活動を推し進めると同時に、他の研究科をはじめ、他大学や研究機関ともさかんに交流することで、多様な関心をもった学生・研究者達が自由に意見交換できる場として機能する大学院をめざしたいと考えています」



全授業が英語&英語で論文の専攻も

専攻は修士課程が国際文化学専攻、グローバルスタディーズ専攻、言語コミュニケーション専攻の3専攻。博士後期課程は国際文化学専攻、グローバルスタディーズ専攻の2専攻となる。国際文化学専攻はこれまでの国際文化学研究を引き継ぎ、「日本」、「共生社会」、「言語文化」、「宗教文化」、「芸術・メディア」の5つの領域に立脚しつつ、幅広いテーマで文化間の問題を扱う。グローバルスタディーズ専攻は「グローバリゼーション」、「コミュニケーション」、「エシックス」の3領域に焦点をあて、国際関係論の中

心とした研究を進めていく。国内外の入学者を多く受け入れる予定のため、全ての授業を英語でおこない、論文も英語で執筆するのが大きな特長だ。言語教育を研究する言語コミュニケーション専攻は、高校英語の専修免許を取得できる過程でもあり、教員をめざす学生はもとより、現役の英語教師も入学予定である。いずれの専攻も国際的な舞台で研究活動を進めている多様な国籍の専任教員が指導を担当する。

「特長としては、人文学の研究手法と、社会学の研究手法との両輪から研究を進めていく点があげられます。現代社会の問題や国際情勢を考える上では、そこに生きて



いる人々がどのように考え人生を生きていくかという個人の視点と社会の目から物事を捉える視点の両方が常に必要です。また、大学院の学びは学内のみで完結せず、他の研究科や他大学との連携も非常に大切になってきます。2001年に本学科の呼びかけにより全国組織である日本国際文化学会が発足し、現在会員が400名ほどいますが、昨年12月には深草キャンパスにて5大学の学生が発表する研究交流会も開催されました。国際学研究は扱うテーマが幅広く、学内だけではテーマが重なることはあまりないのですが、他大学と交流することで類似テーマを研究する仲間が見つかり、刺激

を受け合ったり、ネットワーク的に研究を進めていくことが可能になるでしょう」

型にはまらない指導で、物事の見方を変えていくような学生を育てたいと松居教授。21世紀の熊楠輩出なるか。学びのステージは無限に広がっている。



松居 竜五 教授

07 | Event Ryukoku Museum

お薬師さん、因幡の国から飛び来たる？ 洛中の古刹 平等寺の全貌に迫る

企画展『因幡堂 平等寺』

2019年4月20日(土)～6月9日(日)

休館日=月曜日(ただし4月29日、5月6日は開館)
5月7日

主催：龍谷大学 龍谷ミュージアム、京都新聞、毎日新聞社

洛中のほぼ中央、烏丸高辻に位置する因幡堂こと平等寺は、創建以来「因幡薬師」「お薬師さん」と京都の町衆の篤い信仰に支えられ、今はがん封じの寺として知られる。本企画展「因幡堂 平等寺」は、同寺の本尊をはじめとする霊宝のほぼすべてを展覧する初めての機会となる。

「仏教美術史にとって非常に重要な展示となります。御本尊の薬師如来(重要文化

財)は「日本三如来」のひとつ。天竺(インド)伝来の霊像が因幡国(鳥取県)から都に飛来してきたことが同寺の始まりとされ、この創建にまつわる興味深い説話は今回出展される縁起絵巻に綴られています」

「平安時代、洛中に寺院を建立することがいかに前例のないことであったかが読み取れる」と石川知彦副館長は解説する。

「奈良から京都に都が遷された理由のひとつに、政治的影響力の強かった奈良仏教を遠ざけることがありました。そのため、官寺である東寺と西寺以外、平安京内に寺院建立は許されなかったのです」

平等寺は、それから約2世紀後、11世紀初



重要文化財「因幡堂縁起」鎌倉時代 東京国立博物館蔵 Image : TNM Image Archives

頭に開かれた。六角堂^{こうどう}、革堂と並んで、東西二寺以外の洛中最古刹三寺のひとつである。なぜ許されたのか？

「因幡国から中納言橋行平の元に、靈験あらたかなお薬師さんが自ら空を飛んでやってきた。しかも仏の国インドから日本に人々を救いに来た仏さまだということです。祀らないわけにはいきません。一木造りの重い像ですが、やわらかいお顔でお体もすらっとした、みやこぶりを示す仏像といえます。厨子は火災など非常時の避難を重視したコンパクトな造りで、背面には曳いて運ぶための車輪と綱がついています」とリサーチアシスタントの丹村祥子さん。

初公開となる阿弥陀如来坐像、重要文化

財の釈迦如来立像をはじめ、同寺所蔵の仏像の数々、仏具、仏画、古文書を3章構成で展示し、関連寺院の仏像や台座等も特別に出品。会期中にはミュージアムおよび平等寺で関連イベントを開催する。知る人ぞ知る洛中の古刹・平等寺の全貌に迫り、京都を深く楽しむまたとない機会だ。



龍谷ミュージアム
石川 知彦 副館長、丹村 祥子 リサーチアシスタント

第16回 青春俳句大賞

「龍谷大学青春俳句大賞」は、世界最短の詩形文学である「俳句」を通じて、現代に生きる若者が感じたこと、思ったことを自由に表現し、社会に発表するための場を提供することを目的として2003年度から開催しており、今年度で16回目を迎えました。

今回は約83,000句の応募があり、多くの力作が寄せられるなか、厳正なる選考をおこなった結果、見事に最優秀賞入賞を果たした作品をここに発表します。

中学生部門 最優秀賞

白くまの肉球が踏む暑さかな

静岡県 川合 里菜さん 静岡市立清水第七中学校1年生

評・寺井 谷子

酷暑の日本の動物園。大きな身を持って余すかのように、ゆつくりと動く白くま。白くまの毛はナイロンのような無色で、肉球までもその毛で覆われていると聞く。その姿は地球温暖化の中の人間の姿に重なる。「肉球が踏む」の力。

高校生部門 最優秀賞

ほんものの空よく使ふ村芝居

東京都 笹田 陽太さん 開成高等学校1年生

評・有馬 朗人

田園地帯の集落の住人達が村芝居をおこなっている。芝居小屋の中と外が舞台で、時々外へ出て空に向かって台詞を言ったりする。本物の空を使うところが、村芝居らしい。

短大・大学生部門
最優秀賞

蝶を描き足し未来都市完成図

大阪府 三原 瑛心さん

関西大学1年生

評・小川 軽舟
これから建設される未来都市の完成予想図である。それは美しく壮大だが、どこか冷たくよそよそしい。こっそり蝶を描き足してやったことで未来図に若々しい詩が生まれた。

想いでの修学旅行部門
最優秀賞

東京のどこか寂しき熱帯夜

愛知県 大畑 大耀さん

小牧市立岩崎中学校3年生

評・寺井 谷子

修学旅行で来た東京。皆が集まりたがる不夜城のこの首都。熱帯夜の中、馴染めない齟齬感を抱えながら、作者は繁栄の街の孤独を敏感に感知する。

文学部部門
最優秀賞

秋の日に選んで葉をふむ通学路

茨城県 赤岩 美優さん

常総学院中学校2年生

評・安藤 徹

秋の日、降り積もる枯葉をわざと踏みながら歩く通学路は、学校へ通うためだけのいつもの道と同じではない。それは、目と耳と足とで味わう落葉に心躍り、「秋」を再発見し実感する、小さな旅路なのだ。秋はほら、そこにある。

英語部門 最優秀賞

In the vacant lot where
her house used to be her
poppies are blooming

滋賀県 深尾 ジャネット・メイ さん 一般

評・ウルフ・スティープン

ノスタルジアと喪失感を表す。災害か没後の整理か、この女性の生きた家が在った空き地に咲くポピーの花はかつての庭に咲いたもの。女性の墓地を照らす一隅の花のように今そこに咲く。

08 | People, Unlimited

龍谷人

食育と環境保全を極める 出会うべくして出会った紅茶の仕事

MLESNATEA JAPAN 正規代理店

株式会社 U.C.T.corporation

代表取締役 CEO

増村 匡人 さん

カフェと物販とがバランスよく共存した販売スタイルが好評を博している、スリランカの高級紅茶メーカー・ムレスナ社。増村さんは、その正規代理店のCEOとして3つの直営店の運営を統括しつつ、大阪店のオーナーを務める。なんと休日だと30組2時間半待ちというほどの盛況ぶりだ。しかし、差し出された名刺はもう1枚、そこには別の肩書きが。

「ここ5年くらいで一気にムレスナティーの方が有名になったのですが、元々滋賀県でスプーンというレストランをやっています。食育や医食農連携をベースにして、お客さんはもちろん、働くスタッフも健康でいられるお店、というのがコンセプト。食を通じて、SDGsなどの環境保全や世界平和も視野に入れています。例えば、公害のひどい都市に防毒マスクを送ったり、1食食べるごとに20円を積み立てていき発展途上国に送る活動も。20円は現地の給食費に相当します。厳密にいうとこちらが本業。むしろ、紅茶は一生かけて追いかけているライフワークのようなもの」

増村さんが、紅茶との関わりや、食を通じた社会貢献を深めることになったのは大学時代からだという。

「海外ばかり行っていました。元々紅茶が好きだったのでイギリスやスリランカ、インドに赴き、本場のお茶文化を体感して。そのついでに、友達に頼まれて洋服を並行輸入して販売したり。サンチカ(3号館の地下食堂)に面白い奴がいるって噂になっていたみたいです。スリランカは内戦中でしたから、平和な日本とのギャップに衝撃を受け、こんなに境遇が違っていいのかって。それが今の活動に繋がっています。大学時代、勉強も大事だけどいろんな経験を通じて世界を見てほしいと切に思っています」

そんな増村さんと経営学部の藤岡章子教授のゼミの共同作業で生まれたのがP.45にも掲載のブレンドティー「深草“OTOME”」だ。食を通じた社会貢献のプロフェッショナルである増村さんと、大学とのさらなるコラボレーションが期待される。



ますむら まさと 滋賀県野洲市出身。2000年経営学部卒。一般企業に就職後、2003年に株式会社スプーンテーブル創業。ムレスナティージャパン社のデヴィッド・K 氏の元での5年の修行期間を経て2008年に日本で唯一のムレスナ社の正規代理店、株式会社 U.C.T.corporation を創業。1オーナー1店舗制を採用しており、営業から販売戦略などオーナーに一任するスタイルを採る。

08 | People, Unlimited

龍谷人

困っている人に
真っ先に手を差し伸べる
それが警察官の仕事です

大阪府警察本部地域部長 警視長

大西 隆志 さん

堂々とそびえ立つ大阪府警察本部庁舎。そのなかに地域部という部署がある。地域部とは、落とし物の受付から殺人事件まで街で起こる大小あらゆる事件の初動を担当し、市民生活の安全と秩序を守る部署である。その部長として、大阪府下65の警察署、601の交番、7000人を超える警察官を指揮するのが、本学OBの大西隆志さんである。現れた大西さんは、警察のトップクラス、という物々しいイメージと違って、実に気さくで笑顔が優しい紳士だった。


剣道部一色だった学生時代から、警察をより市民から親しまれる組織にしたいというのが警察官になったきっかけ。警察学校のあまりの厳しさに、初日から道を誤ったのでは、と愕然としながらも「人々に寄り添う警察組織をつくりたい」との理想を追い求めて30年。最初は、大阪で有名な繁華街・十三の交番勤務からスタートし、警視長として組織の方針をつくる立場にまで上り詰めた。ちなみに巡査から叩き上げで警視長になることはほぼ

不可能といわれているから、相当な大出世なのだが、「相手の立場に立って、当たり前のことを大切にきてただけ」と大西さん。

「仕事のやり方がわからない部下には、一つひとつ教えてやり、問題を抱えている部下にはじっくりと話を聞いてやる。そうしているうちにみんな、がんばろうやないかという気持ちが湧いてきて、組織の実績が上がるのです」と話す笑顔に、思わず悩みを相談したくなるような温かさが滲んでいる。

「警察官になって本当によかったと思うのは、困っている人に真っ先に手を差し伸べられるということ。困っている人がいたら絶対に見て見ぬふりをしない、見捨てない。それが私が理想とする警察官です。やっぱり大阪の街が好きですからね。住人のためにお役に立てるということに、やりがいを感じます」

たった一人の理想が、巨大な組織を動かす、大阪の街を優しく見守っている。大西さんはまもなく定年を迎えるが、その信念は多くの後進に受け継がれているはずだ。

A middle-aged man with dark hair, smiling warmly at the camera. He is wearing a dark blue pinstriped suit jacket over a white shirt and a dark blue tie. A name tag with a blue logo is pinned to his left lapel. The background is a blurred office setting with a window and a wooden partition.

おおにしたかし 大阪市出身。1982年経済学部卒。大阪府警察拝命。人事採用、刑事課長、SPといわれる要人警護、警備総務課長、西成署長、警察学校長など様々な役職を歴任し、2018年より地域部部长に就任。剣道教士七段。現在も、週3回は曾根崎警察署の朝稽古に参加してから出勤。全日本・関西学生剣道大会の折には審判も務めている。

最新情報



バドミントン部、 秋の大会でも快勝

バドミントン部が、2018年9月におこなわれた、西日本インカレ(団体)、関西秋季リーグ(団体)において、男女ともに優勝した。西日本インカレでは、男子は4連覇、女子は7連覇となり、関西秋季リーグでは、女子は16季連続の優勝となった。また、同年10月におこなわれた、全日本学生バドミントン選手権大会で、団体では女子が2年連続の準優勝、個人でも女子シングルス・ダブルスの準優勝をはじめ、多くの学生が入賞した。



女子バレーボール部 関西学生秋季リーグで優勝

2018年10月に開催された、2018年度関西大学バレーボール連盟秋季リーグ戦最終戦において、女子バレーボール部が見事優勝を果たした。春季リーグでは3位という結果に終わったが、最後までボールを繋ぐ強固なディフェンス力を発揮し、上位リーグ戦全勝での優勝となった。



龍谷大学、付属平安高校の学生 が個人と団体が「京都市スポーツ大賞」を受賞

京都市が、スポーツの分野において、市民の関心を高め、競技力の向上および市民スポーツの振興等に顕著な業績のあった個人・団体に対して、その栄誉を称える「京都市スポーツ大賞」を、龍谷大学そして付属平安高校から、4名の学生(龍谷大学:柔道部、陸上競技部(卒業生含む))、4団体(龍谷大学:柔道部、端艇部、付属平安高校:硬式野球部、フェンシング部)が受賞した。



第28回日本クラシック音楽コンクール第3位、第24回KOBE国際音楽コンクールで最優秀賞を獲得

吹奏楽部に所属する阪尾優治さん(社会学部3年)が、2018年12月に開催された日本クラシック音楽コンクールにおいてクラリネット部門 大学の部で第3位(1位、2位基準点数達成者なし)、2019年1月に開催された第24回KOBE国際音楽コンクールにおいて、木管楽器部門で最優秀賞(第1位)、兵庫県教育長賞を受賞し、ダブルでの最高位受賞となった。



経済学部の学生が「西日本インカレ(合同研究会)2018」本選で審査員特別賞を受賞

2018年12月に開催された日経BP社主催の「西日本インカレ(合同研究会)2018」本選に、経済学部の大原盛樹ゼミと神谷祐介ゼミの2チームが出場した。11月に開催された予選に、20大学80チームが参加し、そのなかから10チームが本選に進む。本選でのプレゼンテーションの結果、神谷ゼミのチーム(池美月、榎本桃子、薩摩明日佳、篠崎里彩、村松加奈、森田梨那)が最優秀賞、優秀賞に次ぎ、審査員特別賞を受賞した。



政策学部の学生が「第14回京都から発信する政策研究交流大会」にて優秀賞を受賞

2018年12月に開催された、大学コンソーシアム京都主催「第14回京都から発信する政策研究交流大会」にて、政策学部の井上芳恵ゼミ、今里佳奈子ゼミ、深尾昌峰ゼミが優秀賞を受賞した。同大会は、都市の抱える問題・課題を見つけ、それを解決するための研究をおこなう大学生・大学院生が日頃の研究成果を発表する場で、2005年度から開催されている。



政策学部の学生が「第9回アーバンデザイン甲子園」で審査員特別賞を受賞

2018年12月に開催された日本建築学会近畿支部都市計画部会主催「第9回アーバンデザイン甲子園」で、政策学部の阿部大輔ゼミナール(内海ありさ【代表】、大谷歩美、木戸琴音、信貴陸斗、嶋根早紀、中谷有里【副代表】、西野莉央、葉狩佳奈、藤川奏絵、藤本哲、森本臣【副代表】)が審査員特別賞(絹原賞)を受賞、石原凌河ゼミナール防災まちづくりプロジェクト(富上弥生、上村愛、三橋巧、栗尾大成、岡本拓朗)が入賞した。



国際学部生とマルタ共和国第9代大統領マリールーズ・コレイロ・プレカ氏との謁見が実現

国際学部3年生の大饗菜々美さんは、日本人留学生を対象としたボランティア活動の案内やサポートをおこなう団体「CEC-Malta」に加入しており、留学先のマルタ共和国で、病院と日本語語学教室でのボランティア活動に参加。これらの活動をマルタ共和国と日本の人々に広く知ってもらおうことを目的にマルタ共和国第9代大統領マリールーズ・コレイロ・プレカ (Marie Louise Coleiro Preca) 氏との謁見が実現した。



理工学部 永瀬純也講師が「IEEE BIOROB2018」で「Best Paper Award」を受賞

2018年8月、オランダ・エンスヘーデで開催された国際会議「The 7th IEEE RAS/EMBS International Conference on Biomedical Robotics and Biomechanics (IEEE BIOROB2018)」において、理工学部機械システム工学科 永瀬 純也 講師らが執筆した論文が「Best Paper Award (最優秀論文賞)」を受賞した。



理工学研究科の学生が「第27回有機結晶シンポジウム」で優秀講演賞を受賞

2018年10月に開催された、「第27回有機結晶シンポジウム」にて、理工学研究科物質化学専攻修士課程1年生の中川優磨さんが、「Photosalient Phenomena of an Asymmetric Diarylethene」という演題で口頭発表をおこない、優秀講演賞を受賞した。33歳未満の博士研究員までの講演者のなかから選ばれる賞である。



「環びわ湖大学地域交流フェスタ2018」にて、2年連続ベストポスター賞を受賞

環びわ湖大学・地域コンソーシアムが支援する、滋賀県内の地域の課題解決に大学と地域が連携して取り組む活動、および滋賀の魅力を学生が発信する活動の成果を発表する場として、2018年11月、「大学地域交流フェスタ2018」が開催された。昨年に続き、龍谷大学がベストポスター賞を受賞。本プロジェクトには、課外活動チームS-Projectの理工学部の学生を中心に、政策学部、社会学部の学生も参加している。



理工学研究科の博士後期課程1年の清水吉大さんが優秀ポスター賞を受賞

2018年11月、茨城県つくば市の産業技術総合研究所で開催された「第5回公益社団法人日本金属学会研究会 水素化物に関する次世代学術・応用展開研究会」において、理工学研究科物質化学専攻博士後期課程1年の清水吉大さんが、「Mg-H平衡反応における分光学的エントロピーと実験値の整合性」という演題でポスター発表をおこない、優秀ポスター賞を受賞した。



理工学研究科の学生が「ARG第13回W12研究会」で学生奨励賞を受賞

2018年12月、LIFULL本社で開催された「ARG第13回Webインテリジェンスとインタラクション(W12)研究会」にて、理工学研究科電子情報学専攻修士課程1年生の谷 生さんが、研究論文「Flickrデータに基づいた時空間イベント検出」について発表し、学生奨励賞を受賞した。



社会学部の学生が「第38回『地方の時代』映像祭2018」優秀賞を受賞

全国各地の地域に根ざしたドキュメンタリー映像作品を顕彰する「第38回『地方の時代』映像祭2018」において、社会学部3年の関勇斗さん、飛永柊哉さんが制作したドキュメンタリー作品が、「市民・学生・自治体部門」で優秀賞を受賞した。社会学部の正課科目「コミュニティマネジメント実習」(2017年度、松本章伸講師担当)にて制作された作品。



農学部の学生が「『滋賀めし』メニューコンテスト」で学生部門の初代グランプリを受賞

2019年1月、大阪ガスティリパ草津にて、滋賀県産の食材を活用し、県民の健康増進をめざす滋賀県の取り組み「『滋賀めし』メニューコンテスト」が開催された。農学部食品栄養学科2年生の中川怜那さんが、滋賀県産の野菜を使った「近江カブのリゾット」を提案し、学生部門の初代グランプリに選ばれた。



モンゴル西方部の土城跡から 発掘された仏像をモンゴル国ゴ ビアルタイ県博物館に寄贈

農学部食料農業システム学科の中田裕子講師らの研究グループが、2016年にモンゴル国西部のゴビアルタイ県シャルガ郡の遺跡で発掘した、モンゴル帝国時代に作られた等身大の仏像の足部等を、歴史的価値に鑑みてゴビアルタイ県博物館に寄贈した。寄贈にあたり、首都ウランバートル市の国立博物館で特別展が開催され、入澤崇学長が出席した。



「PRIDE指標」においてゴールド を受賞

龍谷大学は、「work with Pride」が実施する、LGBTなどのセクシュアル・マイノリティへの取り組みの評価指標「PRIDE指標2018」において、ゴールドの表彰を受けた。「Policy」、「Representation」、「Inspiration」、「Development」、「Engagement/Empowerment」の5指標において、5点満点の場合、ゴールドに認定される。



大津祭で ボランティア協力を実施

約400年続く大津祭にて、33名の学生がボランティア協力をおこなった。2005年度から継続して関わっており、今年度は、13基のうち2基の曳山の曳き手、先導役、巡行サポーター、会場案内係など、様々な役割で参加し、地域の方々と一緒に伝統行事を盛り上げた。観光客は、お囃子を聞きながら、からくりや粽撒きを楽しんだ。



国際シンポジウム「大谷光瑞師 の構想と居住空間」を開催

大谷光瑞の遷化(逝去)70年を記念した国際シンポジウムが開催され、基調講演、国内外の研究者10名による学術発表、コメントを踏まえた討論がおこなわれた。特に、大谷光瑞が設計にも関与したアジア各地の建築・居住空間に焦点を当てた諸報告がなされ、従来の「大谷光瑞＝大谷探検隊」のイメージを塗り替える、新たな大谷光瑞像が示された。



「第30回 新春技術講演会」を開催

2019年1月、びわ湖大津プリンスホテルにて、「新春技術講演会」を開催した。研究成果の発表の場、また産官学の交流の場として、新年恒例の行事として開催し、今年で30回目を迎えた。今年度は、「課題への挑戦、科学で拓く新たな未来」をテーマに、パナソニック株式会社 執行役員 藤井英治氏の基調講演、また農学部 伏木亨教授の基調講演に加え、瀬田キャンパスの開学30周年にあたり、入澤崇学長が記念講演をおこなった。産官学の各界より、多くの方にご参加いただき、盛会のうちに終了した。



龍谷大学オリジナルブレンドティ「深草“OTOME”」が完成

龍谷大学を香りで表現しようと経営学部藤岡章子ゼミの学生が、ムスナティーの紅茶卸を行う株式会社U.C.T.corporation (P.36参照) 協力の下オリジナルブレンドティ「深草“OTOME”」を開発した。同社提供の様々なフレーバーティの試飲、パッケージ・デザインの検討、テスト・マーケティングなどを経て、柑橘の香りをベースにジャスミンなどを加えた香り高い紅茶が完成。今号のプレゼント (P.49参照) です。ご応募ください。

学部長・研究科長の就任について

文学部長に
安藤 徹(あんどう とおる)教授を再任
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

経営学部長に
梶脇 裕二(かじわき ゆうじ)教授を選出
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

政策学部長に
大田 直史(おおた なおふみ)教授を選出
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

理工学部長・理工学研究科長に
松木平 淳太(まつきだいら じゅんた)教授を再任
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

社会学部長に
山田 容(やまだ よう)准教授を選出
※2019年4月から教授に昇任予定
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

農学部長に
大門 弘幸(だいもん ひろゆき)教授を選出
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

短期大学部長に
中根 真(なかね まこと)教授を再任
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

文学研究科長に
藤丸 要(ふじまる かなめ)教授を再任
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

政策学研究科長に
北川 秀樹(きたがわ ひでき)教授を選出
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

社会学研究科長に
安西 将也(あんざい まさや)教授を選出
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

実践真宗学研究科長に
鍋島 直樹(なべしま なおき)教授を再任
(任期:2019.4.1~2021.3.31)

10 | Book Café

新刊紹介

*値段は全て税込価格で表示
*Book Caféについては龍谷大学
学長室（広報）まで

02 『話し合い研究の多様性を考える (シリーズ 話し合い学をつくる 2)』 出版助成 村田 和代(政策学部教授)編著



「シリーズ 話し合い学をつくる」
待望の第2巻。多領域からの研究・
実践報告や議論を通して、現代社
会に求められる話し合いのモデル
と、それを基調とする社会・制度・
政策のあり方を探求する「話し合
い学」の構築をめざす。言語学、社会学、心理学、教育学、
政治学等といった多様なアプローチからの12編の論
文集である。

2018年9月刊/230頁/ひつじ書房/3456円

02 龍谷叢書 第46巻 『カミとホトケの幕末維新 —交錯する宗教世界—』 共同研究 岩田 真美(文学部准教授)編著 活動



日本の文化・社会・制度が大きく変
容した幕末維新という時期における
思想・宗教・文化研究にあらたな学
的地平を切り開くべく、「廃仏毀釈」
「神仏分離」「民衆宗教」「キリシタン
禁制」など時代を彩るキーワードに
焦点を当てつつ、最新の成果や独自
の視点を盛り込み、幕末維新期の宗教像に再考を迫った
野心的な研究入門書。

2018年11月刊/383頁/法蔵館/2160円

書評「産経新聞」2018年12月9日・「中国新聞」2018年
12月18日・「文化時報」2019年1月1日・「朝日新聞」
2019年1月10日夕刊、1月26日朝刊

01 『古代ギリシャ教父の霊性 —東方キリスト教修道制と神秘思想の成立—』 出版助成 久松 英二(国際学部教授)著者



すべての教会の共有財産である初
期キリスト教の伝統は、5世紀ごろ
までに活躍した「ギリシア教父」の
貢献により形成された。彼らが模
索した「神に向かう人間のあり方」
は、キリスト教霊性として結実し、
修道制、神秘思想、神化思想を生み出した。本書は東方
教会理解の鍵ともなるこれら信仰遺産の成立と発展を
探求した。

2018年11月刊/311頁/教文館/4104円

01 龍谷大学国際社会文化研究所叢書 第24巻 『聞き手行動のコミュニケーション学』 共同研究 村田 和代(政策学部教授)編著 活動



コミュニケーションにおける聞き
手行動に着目し、異文化やジェン
ダーといった社会的なフィルター
が内在された談話における「リス
ナーシップ」(聞き手のあり方や
貢献)を多様なアプローチから実
証的に映し出す。コミュニケーションを「聞き手」の立
場から捉え直すことを提案する12編の実証研究を
ベースにした論文集である。

2018年12月刊/324頁/ひつじ書房/3456円

01 『K. N. ジャヤティラカ博士論文集 第1巻』 みんなの本棚



川本 佳苗(2017年度文学研究科
仏教学修士/京都大学東南アジア
地域研究研究所 研究員/京都府)
翻訳

『初期仏教認識論』(未邦訳)の
著者であり、20世紀仏教哲学を
代表するスリランカ出身K. N.
ジャヤティラカ博士の論文集第
1弾として2編を収録。

2018年11月刊/144頁/サンガ/4104円

出版情報

01:『技術の完成』

今井 敦(経済学部教授) 監修・翻訳・共著

技術文明の本質を多方面から考察し、ハイデガーにも影響を与えた技術批判論。翻訳チームには本学研究者が多数名を連ねている。

2018年10月刊/337頁/人文書院/4860円

書評「ジュンク堂」2018年12月・「週刊読書人」3172号2019年1月11日・「綴葉」374号2019年1・2月

02:『コミュニティ・プロファイリング—地域のニーズと資源を描く技法—』

清水 隆則(社会学部教授) 翻訳

地域創生や地域包括ケア等の地域基盤のプロジェクトをおこなう際、地域ニーズと資源をはじめとする地域の姿を明らかにする必要がある。その最適のハンドブックである。

2018年12月刊/204頁/川島書店/2484円

03:『時範記逸文集成』

木本 好信(文学部特任教授)・樋口健太郎(文学部特任准教授) 編者

院政期官人の平時範の散逸した日記『時範記』の逸文を諸史料より390カ条ほど集成して復原をはかったもの。

2018年9月刊/150頁/岩田書院/2160円

04:『ジャーナリズムの道徳的ジレンマ』

畑仲 哲雄(社会学部准教授) 著者

報道倫理のグレーゾーンに潜む20の難問。現場経験も豊富な研究者ならではの視点で再考する、ジャーナリズムの新しいケースブック。

2018年8月刊/246頁/勁草書房/2484円

書評「読売新聞」2018年11月25日

05:『中世王権の形成と摂関家』

樋口 健太郎(文学部特任准教授) 著者

摂関家を中心に中世王権の実態に迫った論文集。院政期以降、摂関家から王家が分離するという通説を見直し、補完関係に着目して展開を捉え直した。

2018年10月刊/300頁/吉川弘文館/10260円

06:『現代社会における「福祉」の存在意義を問う』

村井 龍治(社会学部教授)・長上 深雪(社会学部教授)・筒井 のり子(社会学部教授) 編者・共著

本学現代福祉学科の現任教員9名と社会福祉専門職として活躍している本学OB4人との共著。現代社会で求められる「福祉」について考察した一冊。

2018年11月刊/300頁/ミネルヴァ書房/6480円

07:『El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense: Jack Shirai y la guerra civil española (『ある日本人義勇兵の道程—ジャック白井とスペイン内戦—』)』

安田 圭史(経済学部准教授) 著者

スペイン内戦(1936~39年)に共和国軍を支持して国際旅団の義勇兵として従軍し、戦死した日本人、ジャック白井の内戦での道程を掘り下げた一冊。

2018年10月刊/97頁/Editorial Académica Española (Beau Bassin, MAURITIUS)/32.90€

08:『地図でみる京都—知られざる町の姿—』

岩田 貢(法学部教授) 共著

京都府内の北から南まで39カ所の町を取り上げて、国土地理院発行の2.5万分の1地形図で現状を示し、町の成り立ちや特徴を説明した地理案内書。

2019年1月刊/80頁/海青社/1728円

書評「京都新聞」2019年2月5日

09:『マンガでわかる家族療法2』

東 豊(文学部教授) 著者

活字だけでは伝わりにくいカウンセリングを漫画化し平易な解説を加え初学者にも理解できるようにしたシリーズ第2作。漫画家は龍大出身の武長藍。

2018年12月刊/157頁/日本評論社/1296円

広報誌『龍谷』のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧できます。冊子版の発送を不要とされる方は、各号に綴じ込まれているハガキ、または以下のデジタル版配信申込ページにてお申し出ください。手続き完了以降は、毎号の広報誌「龍谷」刊行ごとに、ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をいたします。



広報誌「龍谷」デジタル版配信申込ページ
<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>

下記URLおよびQRコードから過去の広報誌(デジタル版)がご覧いただけます



2017年No.83



2017年No.84



2018年No.85



2018年No.86

Digital Library
<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



広報誌『龍谷』87号(デジタル版)プレゼント応募・読者アンケートフォーム

今後のよりよい広報誌づくりのため、Webアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。なお、アンケートにご回答頂いた方全員が、プレゼント抽選の対象となります。

<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>



広報誌『龍谷』からプレゼント

龍谷ミュージアムペア招待券 …………… 10組20名様
ムレスナティー「深草“OTOME”」 …………… 5名様(3つセット)



ご希望の方は、読者アンケートフォームにご回答ください。
また、はがきでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号(龍谷大学卒業生は卒業年度・学部なども)及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。はがきでご応募の場合のあて先は右記「プレゼント」係まで。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。

締め切りは5月31日(金)必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

読者のひろば

いろんな角度から、いろんな分野に視点をあてており、未知の龍大を知ることができ、身近に感じられる。

在学生保護者 Yさん

よく利用するセブンイレブンの商品を開発しておられるのが、龍谷出身の方と知って、ますます身近に感じられました。

在学生保護者 Kさん

自分と同じ、卒業生の方の仕事内容を知ることができ興味深かったです。

卒業生 Nさん

お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。
※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

プレゼント・お便りのあて先

龍谷大学 学長室 (広報)

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話：075 (645)7882

FAX：075 (645)8692

E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

【編集委員】

青戸 英夫、石埜 学、上手 礼子、小野 勝土、
落合 雄彦、笠井 賢紀、梶脇 裕二、河角 隆弘、
木村 友貴、佐々木 郁子、土山 希美枝、
デブナール ミロシュ、田 園、徳田 眞三、外村 佳伸、
長瀬 拳志、野呂 靖、藤原 直仁、藤崎 智史、
水杉 唯可、水野 哲八、山口 大、若林 雅子(50音順)

【事務局】

増田 滋彦、田中 雅子、栃木 紅美

広報誌「龍谷」87号

2019年3月14日発行

編 集：龍谷大学編集委員会

制 作：龍谷大学学長室 (広報)

発 行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (642)1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL

<https://www.ryukoku.ac.jp>



公式 facebook 「龍谷大学」
www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」
www.youtube.com/user/RyukokuUniversity



公式 Instagram 「龍谷大学」
www.instagram.com/ryukokuuniversity/

